

2024 年 8 月 20 日（火）資料（ドラフト・引用不可）

親鸞仏教センター副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅱ期・第 11 回（通算第 17 回）

第三章 「口伝の真信」の核心——悪人成仏のため（1）

加来 雄之

はじめに

『歎異抄』は、編者唯円が、私たちが先師・親鸞の言葉に出遇っている生の深い意味を、「先師口伝の真信に異なることを歎」（『聖典』626 頁。）くことによって果たし遂げるところを課題とする著述です。『歎異抄』は、その課題を、親鸞そのひとが先師・源空聖人のおおせをどのように受けとめたかに学ぼうとするのです。つまり「先師口伝」とは、唯円にとっての先師・親鸞の口伝であり、親鸞にとっての先師・源空の口伝とすることができます。

第一章は、親鸞聖人が先師・源空の「先師口伝の真信」の仏道をどのように受けとめかを端的に標示しています。第二章は、親鸞聖人がその「先師口伝の真信」の仏道を相続していくときの姿勢を感銘深く伝えています。

今回の第三章は、その「先師口伝の真信」の核心についての「おほせ」が示されます。

この章は、第一章から第三章までを安心訓として理解する場合、結びという位置づけをもちます。

第三章は、宗教（信心）と道德（善悪）の関係について、また人間として不可避である善悪の問題について根源的に問い直す視点を与えてくれます。現代の私たちにとっても重要な意味をもっています。また悪の肯定などと誤読されることの多い章でもあります。

【第三章本文】

三
一 善人ナヲモテ 往生ヲトク イハンヤ 悪人ヲヤ

シカルヲ 世ノヒト ツネニイハク 悪人ナヲ往生ス イカニイハンヤ 善人ヲヤ
コノ条 一旦ソノイハレ アルニタレトモ 本願他力ノ 意趣ニソムケリ
ソノユヘハ 自力作善ノヒトハ ヒトヘニ 他力ヲタノム コ、ロ カケタルアヒ
タ 弥陀ノ本願ニアラス

シカレトモ 自力ノコ、ロヲ ヒルカヘシテ 他力ヲタノミ タテマツレハ 真実
報土ノ 往生ヲトクルナリ

煩惱具足ノワレラハ イツレノ行ニテモ 生死ヲハナル、コト アルヘカラサルヲ
アハレミタマヒテ 願ヲオコシタマフ本意 悪人成仏ノタメナレハ 他力ヲタノミ
タテマツル悪人 モトモ往生ノ 正因ナリ

ヨテ 善人タニコソ往生スレ マシテ悪人ハト オホセサフラヒキ

【訳にかかわる校訂】

アルヘカラサルヲ——アルヘカラス

第三章 原文・先人訳

〔 〕は本文にはないが安良岡が補ったと思われる箇所。下線は、訳として検討したい箇所。

蓮如書写本第三章 (段落と番号①～⑦は加来による)	第三章口訳 (安良岡康作『歎異抄全講読』99頁)
三 一 ①善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。 ②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや 善人をや。 ③この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。 ④そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのみこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。 ⑤しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐなり。 ⑥煩惱具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。 ⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。	一 ①善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。 ②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。 ③このことは、一応は、理由があることに<u>近いようであるが、本願と他力との趣旨に反している。</u> ④その理由は、<u>自己の力を信じて善事を実行する人は、〔仏の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。</u> ⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仏の〕他力をお頼み申し上げれば、真実の<u>浄土</u>の往生を果たすことになるのだ。 ⑥<u>煩惱が十分に身に備わっているわたくしたち</u>は、どのような修行によっても、生死〔を続ける迷いの境地〕を<u>完全に脱け出る</u>ことがあるはずがないということをふびんにお思いになって、〔救いとうとなされる本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔善人よりも、〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人<u>こそ、ほんとうに、往生〔できる〕正しい種</u>なのである。 ⑦<u>それゆえに</u>、「善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は〔必ず往生できるのだ〕」と、〔親鸞聖人は〕おっしゃいました。

I 第三章について

(1) 第三章の概要

・第三章は、親鸞の思想の独自性を代表する、いわゆる「悪人正機」として知られる『歎異抄』のなかでもっとも有名な「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」の文から始まる一章。

・高校の教科書などにも紹介され、近現代における親鸞思想の受用に大きな影響を与えた。

・「悪人正機」説については、近年、その表現そのものが問題にされている。「悪人正機」か、「悪人正因」か、「悪人成仏」か。——『歎異抄』の「悪人」とは具体的にどのような存在をさすのか——川田光夫『『歎異抄』を読む』（明石書店、1998年）、平雅行『親鸞とその時代』（法蔵館、2001年）など。論文としては、中村玲太「「悪凡夫正機」の歴史的意義——聖道門への対抗言説に注目して」（『現代と親鸞』47号、2022年）など。

・第三章の「いわんや悪人をや」は、「悪人でも」「悪人さえ」「悪人だけを」を主張しているのではない。

・第三章の「……悪人成仏ため」「……悪人もとも往生の正因」という思想は、『歎異抄』の文脈のなかで理解されなければならない。

・私の個人的な経験では、曾我量深『歎異抄聴記』における機の深信理解を通して、第三章の受けとめ方が大きく変わった。

・『歎異抄』の著者は、第三章のおおせに、法然・親鸞と口伝によって継承されてきた「真信」についての核心を見いだした。その核心は「機の深信」であり、それを見失うと「先師口伝の真信に異な」ることになる。

・『歎異抄』における機の深信（金言）

「聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひと、よしあしということをもみもうしあえり。」

（『歎異抄』〔後述〕『聖典』640頁）

「「二者深心」。「深心」と言うは、すなわちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。」

（信巻引用、善導『観経疏』散善義、深心釈『聖典』215－216頁）

「二つには深心、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根

薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。今、弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで、疑心あることなし。かるがゆえに「深心」と名づく、と。」

(信巻引用、善導『往生礼讃』『聖典』222頁。行巻にも引用。)

・私は、第三章を、法然の謎をもった口伝「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」に対する親鸞の独創的な受けとめが表明されている物語として受けとめたい。

・私は、第三章を「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」(『末灯鈔』第六通、『聖典』六〇三頁)に準じていえば、「浄土真宗のひとは悪人になりて成仏す」として受けとめたい。

(2) 第三章の位置

・『歎異抄』第三章は、『歎異抄』の中でどのような位置をもつのだろうか。

・『歎異抄』は、ある意味では、信仰における善悪へのとらわれをのりこえていくことを課題とする著述である。その意味で、第三章は『歎異抄』の「先師口伝の真信」について核心的な位置をもつ。

・師訓篇十章の中でも第三章と第十章はともに、「とおほせそうらひき」という締め語で終わる特別な位置をもっている。この締め語がもつ意義については諸説がある。私は、法然上人の仰せにもとづく親鸞聖人の仰せ(物語)であることを示す独特な表現として理解したい。

・了祥は第三章を「唯信正因」、あるいは「機の深信」をあきらかにする章として位置づけている。

第一章…唯信の仏道

第二章…唯信の仏道の伝承…「唯信専称」…法の深信

第三章…唯信の仏道の機 …「唯信正因」…機の深信

・第三章の「悪人」は、第一章、第二章の人間理解を通して受けとめなくてはならない。

第一章「弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとするべし。そのゆえは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。……悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」

第二章「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」

(3) 第三章の物語の背景

・源空・親鸞の本願他力の教えが、自力作善的な関心(定散自心)、もしくは善悪関心(信罪福心)という「世のひとつねにいわく」として示される価値観に取り込まれ、その根源的な意味が見失われていた。「まことに如来の御恩ということをばさたなくして、われもひと、よしあしということのをのみもうしあえり。」(『歎異抄』後述、『聖典』640頁)

・師訓として第三章をあげたのは、具体的には親鸞の教えを聞くもののなかに善悪にとらわれる異義が起こっていたからであろう。

「弥陀の本願不思議におわしませばとて悪をおそれざるはまた本願ばかりとて往生かなふべからずといふこと。この条、本願をうたがふ善悪の宿業をこころえざるなり(『歎

異抄』第十三章)

- ・源空の教えのもつインパクト——諸行・修善による往生から選択本願念仏の往生へ
- ・源空以前の悪人救済説

弥陀の誓ぞたのもしき、十悪五逆の人なれど、一たび御名を称ふれば、来迎引接疑はず。

(『梁塵秘抄』巻第二、岩波文庫、16-17 頁)

・法然を弾圧した解脱坊貞慶にも明恵坊高弁にもみずからが悪人・凡夫であるという深い痛みの自覚はあった。しかし、それは善人を理想としたときに落ちこぼれたという意味での悪人でしかない。親鸞は、そのような悪人意識に、虚偽性の臭いをかぎとったのではないか。『歎異抄』の「悪人」は修善的な反省の上になった悪人ではない。

・『歎異抄』の文脈からいえば、直接には第一章の「罪惡生死煩惱熾盛の衆生をたすけんがめの願にてまします。」という言葉を受けている。また『歎異抄』における善導・法然の伝統を考えると、『観経』の下下品の悪人に裏付けられた自覚というべきであろう。また親鸞のいう「他力をたのみたてまつる悪人」については信巻の『涅槃経』に出る阿闍世を想起すべきでかもしれない。

(4) 第三章の構成

- ・妙音院了祥『歎異抄聞記』(悪人正機章、唯信正因)

第三章

○唯信正機

一、初、標所立

善人ナヲモテ

二、破執情

初、挙執見

シカルヲ

二、弁其非

初、直示

コノ条一旦

二、別示

初、弁善人尚往生 ソノユヘハ自力作善

二、弁況也悪人

煩惱具足ノワレラ

三、結所立

ヨテ善人

- ・加来案

第三章は、源空の「善人なおもて往生をとぐいはんや悪人をや」という「おおせ」について親鸞がみずからの理解を表明する「おおせ」である。

- ①先師・源空のおおせ「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」
- ②世の人の見解
- ③それに対する批判
- ④源空のおおせについての親鸞のうけとめ
- ⑤源空のおおせの「善人なおもて往生をとぐ」について
- ⑥源空のおおせの「いはんや悪人をや」について

⑦親鸞の確かめ「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」

(5) 第十三章の異義との関係

「弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ばかりとて、往生かなうべからずということ。この条、本願をうたがう、善悪の宿業をこころえざるなり。」（『聖典』633頁）

=====

II 本文読解

・ 三
・ 一

・ ①「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」

・ 善人でさえもやはり往生を遂げるのだ。いうまでもないことではないか、悪人が〔往生を遂げることは。〕と訳してみたい。

・ 「なを」は、でさえやはり、ですらやはりの意。「もて」は語調を強める。「往生をとぐ」と「往生す」との異なり。「とぐ」は、最後までやり通す、なしとげる、果たす。

・ 善人でさえやはり「往生をとげる」のである。善人の往生を否定しているのではない。問題は①になせ「とぐ」という表現が置かれているのかである。⑦には「とぐ」という表現はない。

・ 「いはんや……をや」は、動詞「言ふ」の未然形「言は」に、推量の助動詞「む」と反語の助動詞「や」とが付いて成った語、言葉で言う必要があろうか、自明のことではないか、の意を示す。「を」「や」は、ともに間投助詞。

・ この句は、誰の言葉か。親鸞か、法然か。

「親鸞「悪人正機説」源流は法然 アピールを 浄土宗会議で声相次ぐ\浄土宗の僧侶らで構成する浄土宗議会で七日、「浄土真宗の宗祖親鸞聖人の教えで有名な悪人正機説は、もともと浄土宗の宗祖法然の悪人往生の思想が源流なのに、知名度が低い」として宗派として積極的なアピールを求める声が相次いだ。……「宗教学者の間では法然上人がオリジナルとの見方が強まっている」「何も言わないと浄土宗が認めたと世間は思う。東西本願寺や教科書会社、文部科学省にきちんと説明すべきだ」……これに対して水谷幸正宗務総長は「親鸞さんが法然上人に全幅の信頼を置いていたのは確か。浄土宗はおおらかなのが長所で、真正面から対立するのは避けたい」と話した。一方、浄土真宗本願寺派の教学伝道研究センターは「だれでも阿弥陀仏に救われるという教えは共通しており、悪人正機説の思想は浄土真宗の専売特許と言っているわけではない」と困惑している。」（京都新聞（2006.3.8 朝刊）

・ 源空の口伝

一、 善人尚以往生況悪人乎 口伝之有り

私に云く。弥陀本願ハ自力ヲ以テ生死ヲ離る可き方便有る善人ノ為をこし給ハス。極重

悪人無他方便輩ヲ哀みテをこし給へり。然ルヲ菩薩賢聖モ之ニ付テ往生を求め、凡夫ノ善人も此の願ニ帰テ往生を得。況や罪惡ノ凡夫尤も此の他力ヲ憑む可シト云う也。惡シク領解シテ邪見に住す可からず。譬ハ本為凡夫兼為聖人ト云カ如し。能々心得可し、心得可。（醍醐本『法然上人伝記』、『法然上人伝全集』787頁。原漢文）

・他の源空の言葉

「罪は十悪・五逆のものむまると信じて、少罪おもおかさじとおもふべし。罪人なおむまる、いはむや善人おや」（『西方指南抄』下末）

「われら罪業おもしといえども、五逆をつくらず。……しかれば下品まではくだるべからず」（『三部経大意』）

など。

・覚如『改邪鈔』

一 如来の本願は、もと凡夫のためにして、聖人のためにあらざる事。

本願寺の聖人、黒谷の先徳より御相承とて、如信上人、おおせられていわく、世のひと、つねにおもえらく、悪人なおもて往生す。いわんや善人をやと。この事、とおくは弥陀の本願にそむき、ちかくは釈尊出世の金言に違せり。そのゆえは、五劫思惟の劬勞、六度万行の堪忍、しかしながら、凡夫出要のためなり。まったく聖人のためにあらず。しかれば、凡夫本願に乗じて、報土に往生すべき正機なり。凡夫もし往生かたかるべくは、願、虚説なるべし。力、徒然なるべし。しかるに、願力あい加して、十方のために大饒益を成ず。これによりて、正覺をとなえて、いまに十劫なり。これを証する恒沙諸仏の証誠、あに無虚妄の説にあらずや。しかれば、御釈にも、「一切善惡凡夫得生者」（玄義分）と等、のたまえり。これも悪凡夫を本として、善凡夫をかたわらにかねたり。かるがゆえに、傍機たる善凡夫、なお往生せば、もっぱら正機たる悪凡夫、いかでか往生せざらん。しかれば、善人なおもて往生す、いかにいわんや悪人をやというべしと、おおせごとありき。

（覚如『口伝鈔』第19条・『聖典』672-673頁）

・源空の口伝における「善人尚以往生況悪人乎」をどのように理解すればよいか。醍醐本の作者（源智）は、「惡シク領解シテ邪見に住す可からず」と、造惡無碍に陥ることへの注意を促している。しかし『歎異抄』第三章および第十三章には造惡無碍を批判していない。

・第三章の善人とは「自力作善のひと」であり、悪人とは、「煩惱具足のわれら」「他力をたのみたてまつる悪人」である。阿弥陀仏の悲願が見いだした人間の実相である。

・「煩惱具足」ということは、「いずれの行にても生死をはなることあるべからざる」（第三章）、「さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいもすべし」（第十三章）と押さえられる業縁存在を意味する。

・「悪人正機」という表現は、第三章よりも『口伝鈔』にもとづく。

・『歎異抄』第三章の文頭の仰せと文末にあげられる仰せの表現が異なっている意義は何か。①の文頭の仰せと⑦の結びの仰せとの差等について

善人尚以往生況悪人乎

①善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。

②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや 善人をや。

⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。

①と⑦は単なる反復ではない。①は源空の仰せ、⑦は④～⑥の親鸞の受け止めとして理解したい。ちなみに、①は反語として問題提起的な表現であり、⑦は確信的な表現である。

・親鸞は①に、『醍醐本』の伝える「善人尚以往生況悪人乎」にない「とぐ」という表現を聞き取っていた。なぜ「とぐ」という表現が必要なのだろうか。「往生をとぐ」と「往生す」とはどのように異なるのであろうか。

・この句のインパクトは、「悪人でも」「悪人さえ」、ではなく「いわんや悪人をや」つまり「悪人こそ」という表現にある。しかしこの言葉は法然の口伝であるといわれ、謎に満ちている。この表現がもつ衝撃と力強さの根拠を解き明かすのが第三章の仰せであろう。